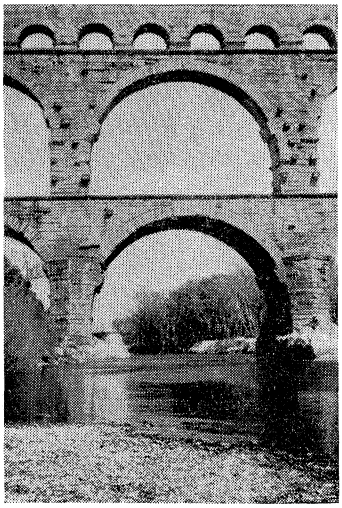


フランスを旅して

昨年の夏パリの L'Ecole des Mines の学生約 70 名が日本を訪ずれ，日本の工業を見学してゆきました。このとき，日本で彼らのお世話をした学生たちが中心となって，フランスを訪ねようではないかということになり，早大，東京工大，東大へ慶応の学生が呼びかけて四大学で約 70 名の視察団を結成フランスを訪ねました。3月21日から4月20日までの約1カ月間見学をし，そして両国の学生の交流により相互の理解を深めたのであります。編集部は過日同視察団に参加された堺　博信，中村良夫，田中　宏，古池弘隆の四君を日比谷陶々亭にお招きして視察団結成にあたり協力をして下さった高橋　裕　東大助教授を囲んで，その旅行談を聞きました。以下は当日の話題を編集部が記したものであります。他国を鏡として今日の自分のありのままの姿を知り，明日への活力とされんことを祈るものであります。

■司会者は語る

今回のフランス視察団が帰国する直前，ストックホルム大学の土木建築専攻の学生 90 名が来日，4月 13 日から5月4日まで各所を見学，日本の活動力のたくましさに感嘆し，あきれ，また東洋ムードがないといって，チョッピリがっかりして帰って行った。これら学生を案内してみて，ものの考え方の相違等で学ぶべきことの多いのに驚いた。彼等の質問の中のいくつかは今も耳底に残っている。「日本は地震国と聞くが，そのためにどれ程余計にコストがかかっているか」，「日本は臨海地帯の高潮に対し，その安全性と経済性との関連を検討する場合，地域性に対しどんな考慮をはらっているのか。その考え方は年とともに変わるのか」等々。若い世代の交流は将来のためにも有意義であると考える。

■フランスのいなか道

フランス国内をほとんどバス旅行したが，あまりよいとも思えない道路を平均 80 km/h で疾走するのには実際驚いた。パリ市内は東京なみの車の洪水で駐車場問題が切実なものとして，クローズ アップされてきているのに，一歩郊外へでるとほとんど車をみることがない。道路幅は日本と大差ないが，道路周辺に人家が密集していないことに起因してか，子供や自転車などのじゃまがないことで 80 km/h のスピードが可能なのであろう。ただし，道路は常に整備されているせいか破損箇所はほとんどみかけなかったこと，また，例の道路工事は旅行中ほんの数回しかみかけなかったのは，本当にうらやましかったことだし，われわれとしても見習うべきことだと思った。

エトワールへ向かう街並み

■街に自動車をみる

「私，滞仏中各所に案内されたが，フランス車以外の車に乗せて案内されたことは一回もなかった」と語られる高橋先生の経験からも知られるように仏国産の車，たとえばルノーR-8，ドーフィン，シムカ，シトロエン，プジョーなどの車以外を使用しているフランス人をほとんどみかけなかったのは，ロールス ロイスからクーペまで雑居している何処かの国と比較して何とも複雑な気持ちであった。KDF(フォルクス ワーゲン)車はどこの国でもみることはでき，フランスもその例外ではなかったが，よく注意してみるとそのほとんどはドイツなどからの留学生が乗りまわしているものであることが，ナンバーの違いによってわかる。最近日本でも話題になっているEEC(欧州経済共同体)の問題に関して，若い交流のあった学生たちの間でも多少の意見の相違はみられるが，概して好感はもっているようだ。ただし，老雄ドゴール評は言葉をにごして語りたがらず，ここでも世代のギャップは覆いがたい現実の問題と思われた。

■ポン・デュガール橋

一名「ローマの水道橋」と呼ばれるポン・デュガール橋をみる。現代に生きるわれわれもとうていおよばないその構想の豊かさは，見る者に大きな感銘を与える。その昔，幼稚であったであろう土木技術で，この山と山との間に橋を架け，なお，それを利用して水道工事まで完成させたこの民族の情熱は，今日ここにみるわれわれに大きな無言の教訓を与えつつある。　(カット写真参照)

■街に日本人をみる

自国の車に国旗をつけて，パリの美しい街並みを走る外交官の乗用車，自動車産業を持つ国で日本だけが，外

国車クライスラーを乗りまわしているのは，実に悲しい姿と見受けられ，また残念であった。日本にはいわゆる「洋行帰り」という言葉が現に生きているとおり，何か外国に対し卑屈な態度をとるかまたは変に尊大ぶるかの二通りの対応方法が考えられるが，パリでみかけた日本人，特に年配の方々の中にそんな気配がうかがえた。若さは貴重なものでわれわれは比較的この点うまくいったのではないかと思っている。

■パーティー

われわれを案内して下さったド・タッシェ氏は実にユーモアを解する人でわれわれの仲間の若干の者を特に自宅にまで招待してくれた。歓迎パーティーの席やその他の機会に氏は若いわれわれの秘めたる希望を認識し，必ずというほど美人との交流の機会をもたせて下さった。今をときめくB・B（ブリジッド バルドー）は仕事の都合で出席できなかったが，日本にもきたことのあるミレーヌ・ドモンジョや本場のマヌカンを並べたパーティーは実に壮観であった。また，これから教えられることはお客を迎えるときには，余裕を持ったスケジュールでのぞみたいということである。例えば日本から工科の学生がフランスを訪れたからといって，フランス人がみて珍らしい，面白いと思うようなフランス工業の有様を見せてくれても仕方がない。それよりむしろ現在のフランス工業を生み出しているフランスの社会なり文化なりを少しでも多く眼で見，肌で感じたいというのがわれわれの希望であった。その点，必ずしも満足のゆくものではなかったが，教えられる点はありました。

■イタリアの印象

フランスからイタリアへ来ると国民性の相違というものが，切実に感じられる。日本，ドイツと並んで世界の驚異といわれた経済復興をなしとげたこの国で，まず第一に感じることは自動車デザインで世界をリードしている素因とも思える彫刻の伝統とあわせ解放的ともいえる明るい南国の空気である。街全体は伝統の美しさの中に日本なみのごみなどが所々に目立ち，パリとよい対象をなしており，どちらかといえば日本人に近い容姿の美しい娘さんたちが印象的であった。フランスにいったときよりイタリアの日々のほうが快晴に恵まれたせいかよい写真を数多くとることができたのは皮肉な話であった。

■メ　ト　ロ

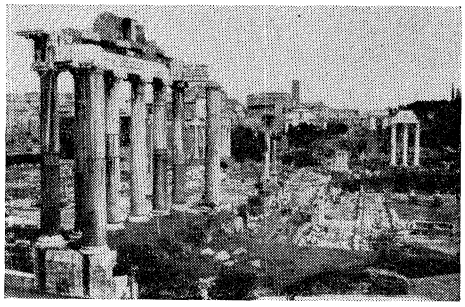
パリといえばエッフェル塔にセーヌ河と並んでその名物に地下鉄がある。市民の足として縦横にはりめぐらされたこの地下鉄は時代の要求によって，次々に増線されたため所によっては数段にわたって交差している。このため乗り換えに駅と駅の間を歩くより時間を要する箇所があり大変であったが，案内標識の充実により初めての旅行者も大体まちがいなく目的地につけることはさすがであった。パリの人々は地下鉄に乗ると「乞食のにおい」がするというが，このことからすると香水がパリで発達した理由としてうなずけるものがあると笑いあったものである。料金が安いこともまたツーリストにはありがたかった。

■歴史の重圧

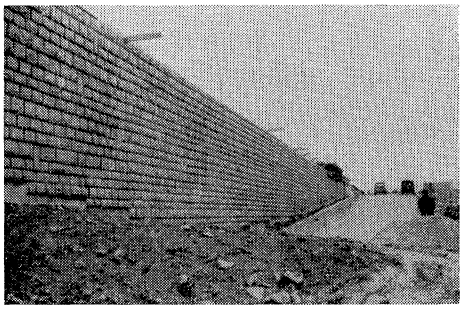
遠くフランス王朝時代の封建社会からフランス革命を経て蕩々とつながるフランスの歴史は，その豊かなる芸術的背景とともに，その指導性は今日にあっても一級である。パリの市内いたるところに見ることのできる爛熟した歴史を物語る風物は旅人の心に大きな印象を与えるとともに，ここを世界の都と呼ばせている。われわれが短い時間ではあったが，語り合う機会をもつことのできたフランスの学生諸君はこの歴史の重圧をどう受けとめているかとの質問にありがた迷惑であるといって，肩をすぼめる動作で答えてくれた。しかし，長い年月つちかわれてきたこの国の伝統はこれに負けることなく，都市計画にあってはパリ ニュー タウンの建設，道路ではパリ～オルレイ間の高速道路と堅実な進展を示し，市内にあっては旧建築物の美化運動ともあわせ，いかにもフランス的と思われる施工が散見できた。だが，日本の持つ成長期の激しさはここではみられず，何かものたらぬ思いがしないでもなかったことを付記する。

■学生気質

日本の大学生では普通とされているサークル活動が，フランスの学生には理解できなかったようで話題にたびたびあがった。私たちが訪ねたフランス各地の大学の学生は食事時間も惜しんで勉学していると話してくれた。フランスと日本の大学教育（工科）の最大の差は，フラ



フォノ・ロマノ



モザイク化粧をする出来上った道路に

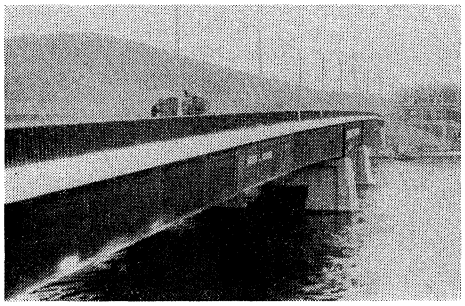
ンスにあっては，専門教育のほかに将来経営陣の一翼をになう場合のために，その方面の勉学が加味されている点だと思われた。この教育方法についてはわれわれの仲間でも賛否両論があり，一概に結論は出せないかも知れないが，おもしろい教育方式と思えた。フランスの学生がわれわれに質問してくることは徴兵制すなわち軍隊についての考え方である。日本に軍隊はないなどといっても話が通じないので，まずこれは黙認しておいた上で討論してみると，フランスの学生にとって徴兵制というものがいかに重要な要因であるかが知られ，この点，日本の学生は恵まれていると思われた。

■工事をみる

道路工事もほとんどみかけなかったが，それにもまして，建設工事をみかける機会があまりなかった。日本へ見学にきたスウェーデンの諸君にどうして東洋の離れ島などへよりにもよってきたのかと質問したときに現在種々の工事，それも建設途上の勉学をする場としては，日本が最高の国であると答えたことと併せ興味を覚えた。イタリアでは日本ほどではないにしても，建設工事などが散見できたことからしても破壊によって新生する意義が皮肉にも現実の姿としてわれわれにささやきかけてきた。長い伝統を重ねてきたフランス文明の重圧の下で同じ擁壁工事をするにもコンクリートの上からモザイクをはりつける作業をせねばならないこの国は実に大変な国との印象を強く受けた。しかし，道路，橋梁，建築物をつくるときに周囲の風景とか場所を常に意識消化施工する土木，建築技術者の見識はさすがであり頭のさがる思いがした。

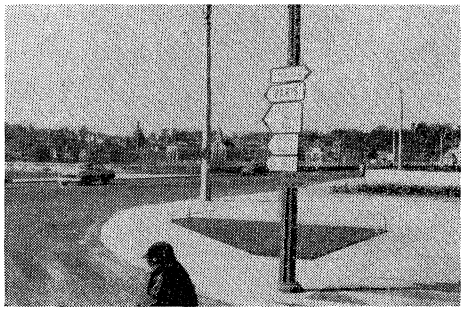
■道路標識は語る

標識の最大の目的はその意図するところを，瞬時に的確に相手に伝えることにつきる。日本の道路標識（改正されつつあるが）をみるとよい点を与えられないどころか，落第点に近いものまである。芸術の国といわれるだけにフランスの標識はみごとであることが痛感された。欧州といえば国境線で区分されてはいるものの，実際は陸続きの土地だけに言葉を必要としないこの種のデザインは，実に効果的で，エトランゼであるわれわれにもその意が何の抵抗もなくわかった事実からしてもよい勉強



全溶接の橋（さびたままである）

となった。まだ，これらの標識の多くはコンクリートでがんじょうにできており，塗料で修正するだけで半永久的に使えて経済的だと，ふと考えたりした。



街と調和する道路標識

■エティケットを教わる

赤字に苦しむ各国の鉄道は，躍進を続ける日本国有鉄道にその秘策を求めていると聞くとき，パリのいろいろな乗物を利用してみる。彼らは習慣的に他人の体に触れることを失礼なことと考える意識が非常に強いことを再認識する。「失礼」という言葉がごく自然に口から出るところに徹底した「個人主義」がうかがえる。ということは何か乗車定員を守って赤字をだしている一つの原因をみたような気がした。だが，乗物は乗れるだけ乗せて，乗れるだけ乗って走るものであるという潜在意識が，われわれの心の中に確実に植えつけられたことに気づき少なからぬ驚きを覚えた。

■帰国してみて

羽田へ着いてまずタクシーの乗車拒否にあい，このみごとな歓迎ぶりに驚いたが，約一カ月ぶりの日本はやはりそのみごとな生命力とともに国自体が活気に満ちている

タクシー乗り場

ように感じられた。若人が大いに海外へ歩をのばし，よい意味での国際人の感覚を身につけることはよりよい明日の日本，さらには世界のために大きく寄与するところがあるとの確信をふかめた。終りにあたって，今度の旅行にあたってわれわれのために協力して下さった方々に心からお礼申し上げる。　【文責・編集部】